

協働的な教員研修の研究

- コアシステムの活用を通じて -

教職実践応用領域 学校づくり履修モデル
名古屋路 春樹

1 今日の社会的背景

社会情勢のめまぐるしい変化の中で、教育現場も新たな課題が次々と生じている。

ここ数年、新採用教員の大量採用のため、若い年齢層の教員が増えている。若手が増え、職場の活性化につながっているが、教師としての力量向上が求められている。

中央教育審議会から平成23年1月に出された「教員の資質能力向上特別部会」の中間報告にあるように、解決が急がれる課題である。

このような時こそ、教員にとって最も身近な校内研修によって教員の資質向上を行うことが必要である。

2 現任校の実態と課題

(1) 現任校について

現任校は、名古屋市の北東部に位置し、都心の住宅街にある。今年度で創立131年目という、市内でも有数の伝統校である。児童数684名（普通学級22学級、特別支援学級2学級）、職員数43名（うち、教員は35名）であり、名古屋市内においては、比較的大規模な学校であるといえる。

ほとんどの児童が、落ち着いた態度で授業に取り組む。教員が日々熱心に指導に当たっている成果であると考えられる。

現任校では、大規模校であるため、組織的な動きが十分できず学校全体の取り組みがうまく機能しないことがある。一つの例が教員研修である。個人レベルで授業実践などの研修を行っており、個人としての成果はあげているが、それが、組織的な指導力向上の取り組みにつながっていない。

大規模校においても、学校としての組織的な取り組みとなるよう、校内授業研究（学校努力点）に教員一人一人が取り組めるようにする必要がある。

(2) 児童の実態と課題

現任校の児童は、日々の授業の中で、まじめに取り組む児童が多い。与えられた課題を着実にこなし、教員の指導も素直に自分に生かそうと努力する児童が多い。

過去の学力調査の結果から、児童の学力は全国平均より高い。特に、知識の習得については、安定して高い水準にある。

しかし、平成23年度学校評価の「児童は、意欲

的に学習に取り組んでいる」項目では、マイナス評価が、全体の約22%を占め、学校評価における全質問項目中、最も多く、評価は低調であるといえる。

また、平成23年度「学習意欲の育成」を目標に行われた学校努力点では、学習意欲を児童にもたせることの難しさ、学習意欲を継続させることの難しさが指摘された。これは、現任校の教員が授業実践を通じてつかんだ児童の実態であると考ええる。

このように、学校評価や各担任の行った授業実践の結果から、現任校の児童は、意欲的に授業に取り組むことが課題である。

(3) 教職員の实態と課題

現任校では、ベテラン教員と若手教員に自主性を促している。その結果、若手教員は伸び伸びと日々の授業実践を行っている。一方、ベテラン教員は自分がこれまで培ってきた授業方法で授業実践を行っている。しかし、互いの考えを伝え、知るシステムが十分の整っておらず、それぞれのよさが、十分に生かし切れていない。

また、現任校においては、知識がおおむね身に付いている児童が多く、児童の実態とかけ離れた目標設定をすることがあり、授業づくりがうまくいかないことがある。

学校評価における教職員向けアンケートでは、「よく分かる授業を目標に、創意・工夫をすることができた」という項目において、4点満点中3点と、教員自身も自分の行っている授業内容に十分満足していないという実態も明らかになった。

しかし、現任校における教員研修は、教員の不安を解消するに至っていない。それは、学校として組織的な取り組みがなされていないことが原因である。

ここから、現任校における教員の課題は

- ① 教員間の学びの場が未整備なこと。
 - ② 目標があいまいな中で授業づくり。
 - ③ 授業づくりに不安を抱えていること。
- の3点にあると考える。

(4) 校内研修の実態と課題

現任校における、校内研修としての授業実践は2種類ある。1つは1人1授業実践である。授業者は、指導案を略案形式で個人で作成する。事前検討会は授業日の1週間前をめぐり、全員を対象に行われる。

事前検討会の参加者は同学年の教員・努力点推進委員長・教務主任である。実践の成果については、各学年単位でまとめを行い、年2回（中間・最終）報告会を行い、次年度につなげている。

もう1つの実践は、上・下学年から1人ずつ選ばれた代表者が行う全体授業である。

教員からは、校内研修として行われている授業実践について様々な問題点が指摘されている。それは、次のようなことである。

【1人1授業実践について】

- スケジュールの調整不足。
- 実践に系統性が無く、単発の実践に。
- 1人1授業実践が個人の成果・課題。
- 事後検討会が無く、授業者が改善案を導き出すに至っていない。

【全体授業について】

- 授業者1人で指導案を作成している。
- 組織での研究体制が取られていない。
- 他の授業実践のつながりが薄く、「全体で見る1人1授業実践」になっている。

3 課題設定の理由

現任校の実態から、既存の方法では、研修を組織的に推進し、効果のあるものにするのは難しい。

そこで、研究推進の原動力となる少人数チーム(コア)を組織し、そこが中心となって学級全体の研究推進をサポートしていくことが現任校に適した方法であると考えた。

このように、教員同士が協働して組織として取り組む中で、教員集団として互いを高め合うことができるのではないだろうか。

そして、協働的な教師の学びが「意欲的に授業に取り組むことのできる児童」を育成していくことにつながると考える。

そこで、教員研修の場の改善を通して、授業改善を行っていきいたいという思いから、研究テーマを

協働的な教員研修の研究

- コアシステムの活用を通じて -

として、実践に取り組んでいきたい。

4 めざす姿

次のような、具体的な姿を意識して、目標に向かって組織的に教員研修を授業づくりに生かしていくことで、教員の資質向上につなげることができると考える。

【めざす児童の姿】

- 自ら意欲的に学習に取り組むことができる児童

【児童像に育てたい力】

- ① 疑問や意外性を感じることができる。

② 自分の意見を積極的に発表し、考えを表現することができる。

③ 次の学習に期待をもつことができる。

④ 自ら課題を見つけることができる。

【めざす教員の姿】

○ 児童が知的好奇心をかき立てられるような授業づくりを行うことのできる教員

【教員に育てたい力】

① 授業の導入場面において、児童が知的好奇心をかき立てられるような教材との出会わせ方を演出することができる。

② 展開・終末の場面で、児童の思考を揺さぶる発問を投げかけることができる。

5 研究の手立て

(1) 研究推進の在り方の改善

① 授業実践の位置付けの改善

校内授業実践が、学年や個人任せになっており、組織的に行われていなかった。

それを、より効果的なものにするために、授業実践の位置付けの改善を考えた。

具体的には、1人1授業実践の成果と課題を全体授業に取り入れ、全体授業をより意味のあるものにする役割をもたせる。1人1授業実践から得た結果を集め、年間2回（前期・後期）行う全体授業を作成する。

【研究の流れの改善案】

まず、学年を上・下学年2つのグループに分ける。それぞれの部会が全体授業作成に向けて、1人1授業実践を行う。

その際、教科は限定せず、「意欲づけ」を手立てとして実践を行う。

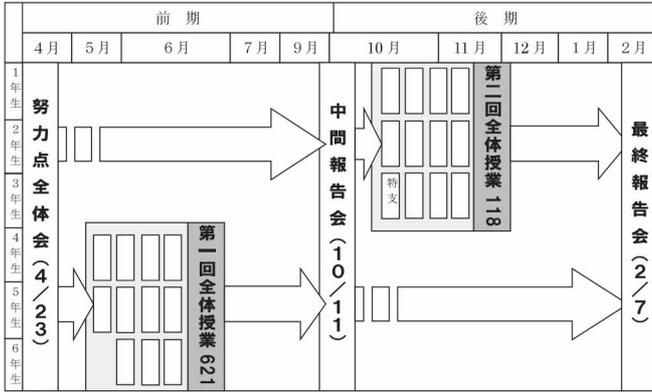
1人1授業実践のつながりが問題となるが「手立て」をそろえて実践を行うというルールを作ることで、多教科で検証がしづらくなったり、実践のつながりがもてないというマイナス面を解消する。

全体授業の設定日は6月と11月とした。前期・後期の中でも中間に位置するため、1人1授業実践→全体授業→反省の流れを作りやすいと考えたからだ。

スケジュールは、年間計画の中にあらかじめ位置付けておく。全体授業の日は決めておき、1人1授業実践は、全体授業日の前の1ヶ月間のうちに行うものとする。

次頁にある年間スケジュールは、実践の進め方をイメージしたものである。表の中にある矢印は研究の流れを、また、□は各担任が1人1授業実践を行った日にちを表している。実践を行わないグループは、「意欲づけ」についての教材研究を行う期間とした。

【年間スケジュール】



【授業実践について】

◎ 1人1授業実践について

【位置付け】

1人1授業実践の成果と課題を全体授業に取り入れ、1人1授業実践に「全体授業作成のモデル」という意味を付与する。

【実践時期】

上・下学年で前期・後期に分かれる。平成24年度は前期は5月14日（月）から、全体授業1週間前の6月12日（火）までを実践期間とする。後期実践は、10月18日（木）～11月7日（水）までとする。

【指導案について】

略案形式で、授業日の1週間前に完成させる。3日前には、全職員の机の上に配布。

【スケジュール管理について】

推進委員が推進委員長に報告する。推進委員長は日程を全体に周知する。

【授業の観察について】

授業実践者は必須。それ以外は、自由に参加して良いものとする。

【事前・事後検討会について】

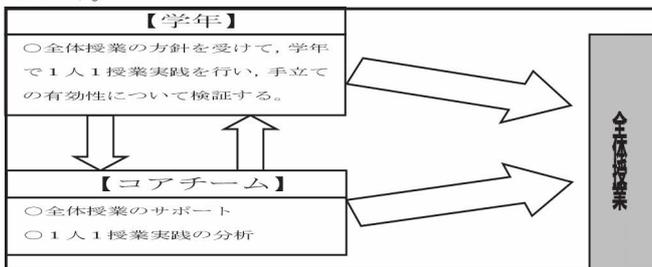
事前検討会は授業日1週間前に実施し、学年が責任をもって行う。検討の観点を授業者が提示する。

事後検討会は、授業実践日の午後に行う。事前検討会で取り上げた観点を検討する。

成果と課題を明らかにし、その日のうちに文章化して推進委員長に報告する。

◎ 全体授業について（コアについては後述）

全体授業は、上・下学年から1人ずつが行う。下図にあるように、2つの流れで全体授業を作り上げていく。



コアチームは全体授業者とともに授業の構想を作り上げていく。全体授業の教科・単元・手立てが確定したところで、部会で提案する。提案を受け、各担任は、全体授業のモデル案を作成して授業実践を行う。

全体授業の事前検討会では、それぞれの実践から得られた成果と課題を持ち寄り、還流の場とし、全体授業を決定していく。

（2）コアシステムを活用した研究組織への再編

これまでの推進委員会は、教務・推進委員長に加え、各学年で1人ずつ選ばれた推進委員（1～6年と特別支援学級から、計7名）の合わせて9名で構成されている。

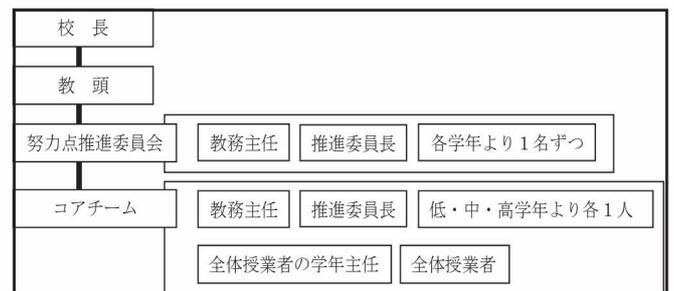
しかし、推進委員会では、視点が定まっておらず、研究推進にあたり有効な話し合いがなかなか成立しづらい現状があった。

現任校における研究推進は核となる組織の動きが無く、研究を組織的に進めていく仕組みを整備することが急務である。

【コアシステムを取り入れた研究推進組織】

下の図のように、コアシステムを取り入れた研究推進組織を編成する。

（コアシステムを取り入れた研究推進組織）



【努力点推進委員会について】

教務主任・推進委員長・各学年で選出された推進委員（特別支援学級を含め7名）の合計9名で組織する。

研究主題や推進計画立案・運営方針決定に携わり研究の進め方を決定する。また、部会内のスケジュール調整を行い、全体授業者の決定も行う。

【コアチームについて】

コアチームを授業づくりに関するサポートを行う専門部署を指すものとする。

コアチームは全体授業づくりの支援を行う。推進委員のうち、低・中・高学年の中から1名ずつ、コアチームへの参加を募る。コアチーム参加者のうち、1名は全体授業者が授業を行う教科主任で構成する。また、学年としての意見をコアチーム内で伝えたり、コアチームでの話を学年に伝えるなど、学年の意見を反映させるため、全体授業者の学年主任も参加する。

コアチームの設置により、これまで1人で行ってきた全体授業づくりをコアチームがサポートを行うこととなり、全体授業づくりの研究推進体制を強化できる。

導入初年度以降、段階的にコアチームの役割を広げていくことで、無理なく、より組織的な授業研究体制を確立できる。最終的には、コアチームが1人1授業実践の支援を行えるようにする。

(3) 授業実践の共有化

① シートを活用した話し合いの焦点化と共有化
 授業研究に際して、視点を絞ったシートを用意して、効率化・焦点化を図る。

検討ポイントを事前にシートに明確化させ、その点に絞って検討を行う。フォームを示すことで、ポイントのみの記入になる。

全体授業の検討会も、同じ形式のシートの活用を通して、焦点化された話し合いを目指す。

② 「努力点だより」を活用した授業実践の成果と課題の共有化

1人1授業実践の事後検討会ごとに、成果と課題を必ず文章化し、推進委員長に提出する。推進委員長は、提出された文章をもとに、「努力点だより」を発行して、授業から得られた成果の全体への共有化を図る。

6 先行事例の研究

(1) 意欲づくり

栃木県総合教育センターによる「学ぶ意欲をはぐくむ」を参考にした。

学習意欲は「欲求・動機」→「学習行動」→「認知・感情」が循環して育っていくとしている。ベースとなっているのが「知的な好奇心」で、知的な好奇心に働きかける授業を行うことが必要であると指摘している。

(2) 協働的な教員研修

上越市立高志小学校で取り組まれていた「教師も学び合う「協働文化」を生み出す学校スタイル」という研究を参考にした。

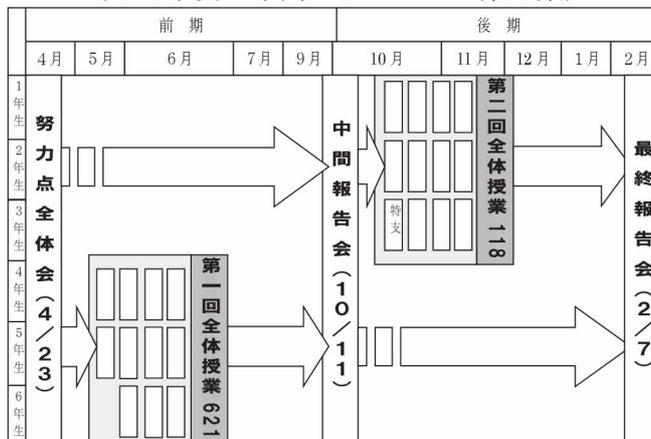
筆者によれば、「協働」とは「各教師のユニークなアイデアや実践を尊重しつつも、相互の連携を深めて、各教師が成長発達して学校全体の教育実践の質を高め、生徒の学習を促進させる文化」だと指摘している。

7 研究の実践と考察

(1) 研究推進の在り方の改善

平成23年度末に、組織だった研究が行われるよう24年度の年間スケジュール第1案(右上図)の作成を行った。

〈24年度 年間スケジュール第1案〉



改善のポイントは、

- 1人1授業実践の成果と課題を全体授業に取り入れるようにすることで、1人1授業実践に「全体授業作成の参考になるもの」という意味をもたせた。
- 上・下学年を集中して学年を上・下学年2つのグループに分ける。
- 全体授業は、上・下学年から1人ずつが行う。設定日は6月と11月とした。
- 1人1授業実践のスケジュールを年間計画の中に位置付ける。全体授業の日は決めておき、1人1授業実践者は、全体授業日の前の1ヶ月間のうちに行う。

の4点である。

平成24年度4月当初「第1回努力点推進委員会」で、研究主題、研究のねらい、年間スケジュール第1案の検討を行った。

具体的な推進方法として、教員から「他の教科の実践も取り組んでみたい」という声を受け、得意分野を生かすために実践教科を自由とすること、学校努力点のテーマを「意欲づけ・意欲の継続」として、教科が異なるために生じる実践のつながりの問題を「手立て」をそろえて実践を行うことなど、推進委員長より説明を行った。

その結果、推進委員より、2点の意見が出された。(意見1: 1人1授業実践のグループ分けについて)

学年は前期実践、下学年は後期実践として取り組むことについて、「実践は年間を通じて行われるべきで、前期にやったらそれで終わりはおかしい。」「児童の変容を1年かけて見るべき。」「実践のない期間、結局何もやらなくなってしまうのでは。」という意見が推進委員から多く出た。

推進委員からは「一年を見通した実践が必要であるので、学年を二つに分けて実践を行ってはどうか。」「全体授業をサポートする考えは理解できるので、ぜひやってもらいたい。」との声が多く上がった。推進委員から、「授業実践は、学年を二つに

分けて、前期・後期で行ってはどうか。」という意見が出され、修正案として決定された。

(意見2：授業実践の日程について)

推進委員の1人から、「全体授業の日程を考慮してほしい。授業実践の期間が短すぎる。」という意見が上がった。提案では、第1回の全体授業を6月21日、第2回の全体授業を11月8日としていた。前期を例にとると、1人1授業実践を全体授業に生かそうとすると、おのずと授業実践の期間は、5月～6月上旬となり、狭すぎるというものだ。

そこで、会の中で、推進委員長が推進委員に意見を求めたところ、「全体授業から中間報告まで期間が長いので、全体授業を後ろに送ってはどうか。」「全体授業が長期休業をまたげば、(前期なら)1学期の終わりまで、実践期間に当てることができる。」との意見が出て、全体授業は長期休業をまたいだ、学期開けに行うことが決定された。また、実践時期も前期実践は1学期中、後期実践は2学期中と変更となり、決定された。

細かな日程の提示については、推進委員長が再び案を作成することで合意を得た。

しかし、「学期をまたいだ1人1授業実践も認めてほしい。」という意見については、「1人1授業実践を全体授業に生かす」という観点から、認められなかった。

話し合った結果、全体授業は学期開けに行うことが決定された。実践時期も前期実践は1学期中、後期実践は2学期中と変更となり、決定された。

第2回推進委員会での再提案を前に、第2案についてコアチームで検討を行った。

〈年間スケジュール第2案〉

	前期					後期				
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
1年生										
2年生										
3年生										
4年生										
5年生										
6年生										

努力点全体会(4/23) → 第一回全体授業(9/13) → 中間報告会(10/11) → 第二回全体授業(1/17) → 最終報告会(2/7)

改善のポイントは、

- 学年内で前期・後期に分かれ、年間を通じて実践をつないでいくように改善した。また、前期実践を後期実践につなぎ、研究を進めていく形に変更した。
- 全体授業の日程の変更を行った。前期は6月21日から9月13日へ、後期は11月8日から1月17日へ変更した。

の2点である。

変更点について、コアチームに意見を求めたところ、変更後のスケジュールで研究を進めていくことを決定した。

コアチームでの検討を経て、第1回努力点全体会において、年間計画が了承され、実践が正式にスタートした。

研究推進を改善した結果、昨年度、前期に実践を行ったのは5実践に留まっていたが、今年度は11実践あった。結果的には、実践数において、前期実践が充実した。しかし、5つの実践が7月に行われており、期限間近に駆け込みで行った実践がいくつか見られた。その結果、大前提である「1人1授業実践を全体授業に生かす」ための材料を確保するために、全体授業計画に遅れが生じてしまった。

後期実践においては、順調に実践は進んでいる。12月18日現在で、後期に予定されていた全ての実践が行われた。冬季休業前に、後期の全体授業に向けた話し合いをもつことができる見通しである。

【成果(○)と課題(●)】

- スケジュール改善を行った結果、計画的な授業実践を行うことができた。
- 1人1授業実践に意味づけが、授業者に実践意欲をもたせることができた。
- 「みんなで全体授業を作り上げる」という方法が、全体授業を意識した授業づくりを促した。
- 学年にスケジュール管理の主体を移したことで自主的な授業検討があった。
- 組織的に運営されていない学年や実践があり、サポートが必要であった。

(2) コアシステムを活用した研究推進

① コアシステムを活用した研究組織への再編

授業づくりに関するサポートを行う専門部署である「コアチーム」の組織化を実践した。

四月当初に行われた、第1回努力点推進委員会で推進委員に向けて、コアチームを取り入れた研究推進組織とコアチームの役割を下のように提案した。

○ 提案したコアチーム初年度の役割

- 全体授業の授業づくりをサポートする。
 - ・実践教科・単元・手立ての立案を補助する
 - ・指導案作成の補助をする。
 - ・全体授業者が1人1授業実践を参考にする際のパイプ役を担う。
- 1人1授業実践の分析
- 「努力点たより」の発行
- 全体授業事前検討会の取り回しを行う。

推進委員からは、おおむね案が了承された。

後日行われた第1回努力点全体会において、「全体授業をサポートすることが行われるようになるの

はよい。」「たよりで他の実践を知ることができるのは、よいことだ。」との声があがった。

この2つの会を経て、コアシステムを活用した研究推進がスタートした。

② コアチームでの全体授業づくりのサポート

ア 全体授業に盛り込む要素の検討

コアチームが中心となり、全体授業に向けた話し合いを行った。

授業者から実践教科を「理科にしたい」という希望を受けた。コアチームとしては、授業者の意向を尊重するため、実践教科を理科で了承した。実践を6年の理科、単元「月と太陽」に決定した。

後日、コアチームで、前期実践から得られた「努力点シート」を見ながら、授業者にどの要素を提示するかを相談した。「なるべく児童に実験をさせたい。」という授業者の意向から、「具体物操作」と「予想活動」を手立てとした実践に着目した。

参考にした実践は、2年生の体育科（単元：ドッジボール）で行われた前期実践である。ボールを投げる動作を身に付けさせるために、導入場面で紙鉄砲を用いて活動を行うというものである。

コアチームの検討では、導入場面における具体物操作は、児童が意欲的に活動する上で有効であるという結論が得られた。

下の資料は、4年生の算数科（単元：小数）の1人1授業実践後に作成された「努力点シート」の課題について記載された部分の抜粋である。

【授業者によって事後に作成されたシート】

● 測定活動に入ると測ることに関心がいくので、測定活動をする前に長さの予想をさせて行うことももう少し意識させるとよいと思う。

コアチーム内での話し合いにおいて「実験を主活動とするなら、この指摘（上記の資料）にあるように、実験結果を予想する活動は実験をより効果的にする。予想活動を手立てとして授業者に提案してはどうか。」という意見がメンバーから出された。しかし、別のメンバーからは「実験を要する活動において、実験結果の予測は当然のことではないのか？」という意見の者もいた。

結局、「意欲の継続」のためには、「実験をしたい」と児童に思わせることが必要であり、あえて予想活動に着目させる必要があるという結論に至った。さらに、前期に行われた他の実践でも、同様の指摘があったため、「全体場で提案した方がよいのでは？」というメンバーがいた。

最終的に、「予想活動」を全体授業に盛り込む要素に決定した。

イ 全体授業第1案検討

第1案ということもあり、コアメンバーを含む学年内での検討となった。

学習活動1は、コアメンバーより、「具体物を用いるべき」という指摘を行った。

指摘に基づき、コアチームが授業者と相談しながら、改善案を提示した。

学習活動2では、実験の方法論が話題となった。コアメンバーからは、複数人数が同時に行うことのできる方法を考えるべきとアドバイスを行った。

学習活動3では、まとめの活動を行う。しかし、コアチームで相談を行ったところ、「まとめの活動として、意欲的にまとめを行うことのできる手立てが必要なのではないか。」という意見が出た。

ウ 全体授業第2案検討

コアチームで第2案の検討を行った。

前回の検討を経て、変更された点と、もともと設定のなかった、学習のまとめの場面における手立てについて検討を行った。

学習活動1では、学習活動の中に「予想活動」を組み込み改善されていた。

学習活動2・3では、授業者からの案では、文言に変更は無かった。しかし、コアチームは、学習活動1を「天体に対する意欲づけの場面」、学習活動2を「実験で確かめる場面」とすることが妥当だという結論に達したため、授業者に提案した。

前期実践では、「終末場面」に手立てを考えた実践は一つもなかった。授業者も悩んでいた。そこで、本時の学習の中心的な活動となる実験の結果を生かした問題を作成することが、コアチームの話し合いで決まり、授業者に提案した。

エ 最終案の作成

第2案を検討した後、コアメンバーの提案により、細案を作成することになった。

指導案に、新たに「(4) 努力点授業として取り組むこと」という項目を追加した。

コアチームで全体授業に向けて話し合われた内容を記入し、全体に示す必要があるというコアメンバーの意見を受けて、追加することとした。

学習活動1では、第2案の検討内容を反映するために、具体的な発問についてもコアチームが指導案作成の助言を行い、授業者とともに作り上げた。

学習活動2において、これまで学習活動1に設定されていた予想活動を取り入れた。前回の検討において、実験の直前に行った方がよいという指摘がコアメンバーからあったからだ。

今回の検討で、最も大きなものは、学習活動3の終末場面である。コアチームが授業者と問題の作成を行った。月の見え方を「腕の角度」をキーワードにつかませる本時の学習に合うよう製作した。

〈第2案で示された学習活動3〉

15分	3 実験の結果を振り返り、本時のまとめを行う。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 満月、新月、半月、三日月の太陽と月の位置を手の開き具合を再現することで、太陽と月との位置関係がとらえられるようにする。 ○ それぞれの位置での月の形をワークシートに書き込む。 ○ ワークシートに書き込んだことを発表し、まとめを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 太陽・月との位置関係と月の形の関係を理解することができたか、発言や記述、活動の様子からつかむ。
-----	-------------------------	--	---

後日、コアチームの取り組み(指導案作成の補助)として、同じ指導案を用いて、推進委員長が授業を行い、当日の授業の流れの確認を授業者と行った。

前期実践を終えて、コアチームは、全体授業作りにおいて、「実践教科・単元・手立ての立案を補助する。」ことと、「指導案作成の補助をする。」ことにおいては、これまで述べてきたように、おおむね役割を果たすことができたと言える。しかし、「全体授業者が1人1授業実践を参考にする際のパイプ役を担う」ことについては、何をもって、「パイプ役」とするのか、コアチームとしてもはっきりとした方針をもつことができなかつた。従って、前期実践においては、この点について十分に役割を果たしたとは言えない。後期実践では、「全体授業者が1人1授業実践を参考にする際のパイプ役を担う」ことがどのような活動を指すのか、コアチームで共通理解を図り進めていく必要がある。

オ 後期全体授業

後期実践に向けてのコアチーム内での話し合いの中で、「早い段階で骨組みは決まっていた方がよい」という意見が出された。中間報告会の場で、後期全体授業者から、全体授業で取り組む教科・単元・手立てを紹介することが決定された。さらに、推進委員長が「パイプ役は、全体授業者が行う授業のモデル授業を、1人1授業実践で他の職員に行うよう調整を行うことでどうか」と提案したところ、コアメンバーから同意が得られ、決定された。

中間報告会では、前期実践の総括として「3つの学習場面(導入・展開・終末)を意識して、1学習時間にわたって学習意欲を喚起する」ように後期実践で取り組むこととなった。さらに、後期全体授業者から後期全体授業は「1年:国語科(単元:たぬきの糸車)」で取り組み、動作化を手立てとする意向が伝えられた。

「動作化」という手立ては、前期実践において、1年の算数科、2年の体育科、6年の社会科で手立てとして紹介されたものである。それは、事前に行ったコアチームと授業者との話し合いで、コアチームが提案した内容である。

カ 後期実践での「パイプ役」としてのコアの姿

現任校には、国語科を専門に長く研究を続けているA教諭がいる。コアチームは、A教諭がサポート役に適任であると決定し、協力を依頼した。

後期全体授業者とA教諭との話し合いの場を、コアチームが中心となって設定した。A教諭は自身の1人1授業実践を全体授業の助けにと、全体授業者の意向を反映した授業の作成を引き受けた。

授業は2年の国語科(単元:お手紙)で行われた。全体授業者によると、登場人物の心情を考えるために行う「動作化の手立て」や読みの学習後半で学習意欲を継続させるために登場するペープサートなど、参考になることが多く、指導案作成の参考とすることができた。

〈後期全体授業第1案の抜粋〉

下は第1案の1頁目に書かれた、本来は「どの実践を参考にし、どのような手立てを考えたか」を記述する部分である。第1案ということもあり、この時点では曖昧であったため、この後、コアチームとともに作り替えた。

(4) 努力点とのかかわり	<ul style="list-style-type: none"> ○ たぬきが糸をつむぐ様子や踊りながら帰っていく様子、動作化することで、楽しみながらたぬきの気持ちを考えることができるようにする。その際、単に体を動かすだけで終わらないよう、本文中の表現と動作・気持ちを結び付ける活動も取り入れるようにする。 ○ ワークシートに自分の考えを書く場面では、丸つけをしながら机間指導し、自分の意見に自信をもって意欲的に発表できるようにする。 ○ まとめ場面では、本時に読み取ったことをもとに、本文にないたぬきのセリフを考える学習活動をする。挿絵に吹き出しをつけることで、場面の様子やたぬきの心情をとらえやすくし、考える意欲をもたせることができると考える。
---------------	---

下は、上の□で囲った部分にあるように、1人1授業実践から得られた要素を生かして、作成された指導過程の抜粋である。

23分	4 おかみさんの家から帰っていくときのたぬきの気持ちを読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ P78L6~8のたぬきの動作をさせて、うれしい気持ちが表現されていることに気付かせる。 ○ 発表する児童にはたぬきの挿絵を準備させ、挿絵の絵と台も使って楽しく動作化できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 動作化を通してたぬきの気持ちを想像することができたか、様子や発言内容からつかむ。
-----	----------------------------------	--	--

10分	5 本時のまとめをする。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時の読み取りのまとめとして、たぬきの気持ちを考えてワークシートの吹き出しにせりふを書かせる。 ★ せりふがなかなか書けない児童には、板書の内容を参考にするよう声をかける。 ○ 発表の際は、たぬきの耳としっぽをつけてたぬきになりきり、気持ちをこめてせりふを言わせるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ たぬきが話した言葉を想像して付け足すことができたか、記述や発表の様子からつかむ。 ○ 本文にない言葉を進んで考え、想像を広げて楽しく読むことができたか、発表内容や表情からつかむ。
-----	--------------	--	--

冬季休業中に行った検討の結果、前期・後期実践を通じて多くの実践で取り入れられていた「教材提

示の仕方の工夫」を手立てとすることが決定された。それにより、導入・展開・終末場面の手立てが出そろったことになる。

また、全体授業の細案の中の「(4) 努力点とのかかわり」については、下にあるように、コアチームでより伝わりやすくなるよう文言の変更が行われた。どの実践からどのような要素を取り入れたのかを、より明確に示すことで、1人1授業実践とのつながりを強調するためである。

【変更された「(4) 努力点とのかかわり」】

(4) 努力点授業として取り組むこと

前期で課題となった「つながり」と「難易度」を意識して授業を組み立てた。特に、「つながり」として動作化が吹き出しの記述内容に大きく関わってくるのがポイントである。

【導入場面】…挿絵の提示教材提示の工夫として4年の算数科、5年算数科の実践を応用。

学習の始まりや場面が変わることを象徴的な挿絵を提示することによって、児童が物語に入り込みやすくなるようにした。

【展開場面】…動作化前期(1年)後期(2年・5年)実践で行われたものを参考としている。

ためきの立場になって気持ちを想像する活動に、児童が意欲的に取り組むことができるよう、児童の実態から取り入れた。

【終末場面】…吹き出し動作化によりつかんだためきの気持ちを表現させる手立て。

場面の様子やためきの気持ちを表現しやすくするために取り入れた。

今後は、よりよい指導案と授業をめざし、コアチームと授業者が二人三脚で最終調整を行っていく。

【成果(○)と課題(●)】

- 実践教科・単元・手立てに至るまで、全体授業づくりの補助をコアチームで行うことで、組織的な全体授業づくりを行うことができた。
- コアチームでの検討を重ねた結果、1人1授業を全体授業に生かす道筋を立てることができた。
- パイプ役として機能するためには、特に、前期の全体授業のスタートを早めに行い、平成24年度後期のような動きをしていく必要がある。

③ 1人1授業実践の分析

これまで現任校では、1人1授業実践を行った後、事後検討会が満足に行われていない実態がある。これでは、行った授業に対して客観的に分析する場がなかった。

授業研究における事後検討の重要性は言うまでもない。さらに今回は、1人1授業実践が「みんなで全体授業を作り上げるための参考」という位置付けであるため、実践で得られた成果と課題を明らかにすることは重要性を増している。

全体授業に1人1授業実践を生かすためには、各実践で出された成果と課題を吸い上げる必要があ

る。そのため、明文化して各1人1授業実践から吸い上げることを目的に、「努力点シート」の作成をした。

〈作成された努力点シート〉

努力点シート 名前 ()

1人1授業について

1	教科 図画工作	単元 さらさら シーズー
---	---------	--------------

意欲をもたせるための手立て

- 教科書などの参考資料を見せずに、紙道を実際に描らせて、揺れる動きを十分に楽しませ、おもちゃをつくる意欲を高めさせる。
- 製作前に話し合い活動を取り入れ、つくりたいもののイメージを膨らませる。
- 完成図を見せず、できたところで、「次にシーズンに乗せるものをつくるよ。」と次の工程の話をするようにし、新しい楽しみをもたせることで、意欲を継続させる。

成果

- 揺れる動きを存分に楽しませてから、揺れるおもちゃをつくることを信じたところの児童も興味もち、「早くつくりたい。」と意欲を見せた。
- つくる前に話し合い活動を行ったことで、児童はつくりたいおもちゃのイメージをもつことができ、ほとんどの児童が、すぐさま製作に取り掛かることができた。
- すべての製作過程を信せず、次の活動を小出しに知らせることで意欲を継続させることができた。

課題

- 話し合い活動でいろいろな意見が出たにもかかわらず、児童の作品が「スイカのシーズン」と「紅のシーズン」に大きく偏ってしまった。
- シーズーに乗せるもの見本として、教師が簡単に描いたタマの絵を、半数の児童が同じように描き、シーズンに乗せていた。
- 児童は、意欲はあっても、製作に対する不安や自信のなさがあつた。児童の発想を引き出し、一人ひとりの児童の活動や作品のよさを認め、励ましの声をかけながら指導をしていく必要性を感じた。

授業者は、実践後、学年での事後検討会を行う。学年での検討を経て、推進委員長にシートを提出する。この手順は、前期・後期実践を通じて、全ての実践で行われた。

分析はコアチームを中心に行つた。

上の実践を例に分析の様子を明らかにする。

まずは、成果について、指導案と事前・事後検討会の記録を読みながら、検討を行う。検討の視点は「意欲づけ・意欲継続」についてである。

意欲づけ…①導入場面における試行錯誤の活動
意欲継続…展開場面における
②話し合い活動
③教材提示の仕方の工夫

これを見ながら、コアチームで、どの成果が他の授業で転用でき、さらに全体授業に取り入れることができるかという観点で話し合いがされた。

この実践では、上の枠内の①と②で要素としてどちらを採用するかを話し合った。この中で、コアメンバーより「話し合いの有効性よりも、試行錯誤の活動を取り入れたことが、後の製作活動に効果的であったと考えられる。」という意見が出され、コアチームとして、①の活動を全体授業に生かすことのできる要素と決定した。

その後、取り出された要素を全体に周知するため、推進委員長が「努力点たより」を作成する際に、文章化を行つた。

発行前には、推進委員長が授業者にコアメンバーで行つた検討内容の説明を行つた。記載内容が授業者の意図に合っているかの確認を行い、最終的な確認とした。

【成果（○）と課題（●）】

- コアチームで分析を行うことで、分析を客観的に行うことができた。
- 努力点シートを作成したことで、授業を実際に参観していない教員にも授業分析を可能にした。
- 努力点シートを活用することで、それまで行われなかった1人1授業実践の事後検討会を約束することができた。
- 学年によって取り組みに差が生じた。

④ 「努力点たより」の発行

たよりの発行は、先述した努力点シートの分析結果を全体に周知する目的として行った。たよりの作成については、第1回努力点推進委員会において、了承された。作成は、コアチームで行うことも認められた。たよりの発行回数は、当初の予定通り1人1授業実践につき1部ずつとした。

しかし、前期に行った発行は2部に留まった。実践後の努力点シートの分析を行った後、紙面の構成にあらかじめ方針を持たずにいたのが原因だと考える。

〈努力点たよりの抜粋〉	
★ 実践3 (実践日6月5日：1-3)	
教科：図画工作	単元：コロコロ ゆらゆら
ここがポイント！	
導入の場面	始めに、試行錯誤しながら、実際にやってみるという活動の工夫により、児童に学習意欲の高まりが見られました。

【成果（○）と課題（●）】

- コアチームが授業の要素の分析を行うという道筋を立てることができた。
- たよりの原稿作成については、コアチームを生かすことができていない。

⑤ 全体授業の事前・事後検討会の取り直し。

ア 事前検討会

当初の計画段階と変わり、事前検討会では、全体授業のみ取り上げ、前期実践の還流は中間報告会で行うことが決定された。全体授業事前検討会当日の取り直しは推進委員長が行った。

イ 事後検討会

コアチームで検討したところ、「KJ法は形骸化しているので変更した方がよい」という意見が多く出た。そこで、推進委員長が「児童（抽出児）の姿から、それぞれの学習場面において手だてが有効であったかを観察していく」という方法を提案したところ、了承された。

話し合いグループ（抽出児3人と全体の計4グル

ープ）の取り直しは、コアメンバーで行うこととなった。

各グループでの話し合いは、各観察者が児童の様子から、手立てが有効であったかどうかを討議する形が確認された。

全体授業事後検討会当日は、コアメンバーがグループ内で、司会を務め、参加者から意見を求める姿が見られた。

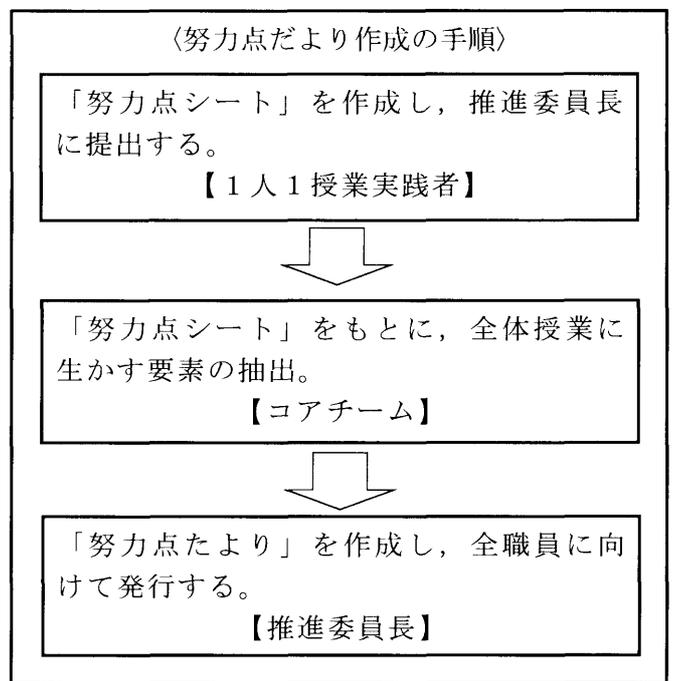
成果と課題を努力点シートに記入し、発表し合った。グループ討議では、取り直しをコアチームの役割として位置づけた結果、活発な意見交換がされた。

検討会では、①導入～展開への児童の思考のつながり②発展問題の難易度についてが話題の中心となった。これまでの検討会にない焦点化された討議が行われた。

【成果（○）と課題（●）】

- 事後検討会において、コアチームが各グループの司会を行うことで、討議内容の焦点化を図ることができた。
- コアメンバーが司会者としての明確な役割を果たすことで、活発な議論を生み出すことができた。
- 事前検討会において、前期・後期ともに明確な手立てを打ち、改善を行うことができなかった。

(3) 授業実践の共有化



① シートを活用した話し合いの焦点化と共有化

授業を見る視点の焦点化と授業研究の効率化・焦点化を目的に授業観察シート作成を行った。

このシートの利点として、指導案とシートの2つを作成する負担感の軽減、授業の「導入・展開・終末」の3つの場面に「意欲づけ・意欲の継続」の手立てを授業者が意識しやすくなることなどがある。

ア 授業観察シートの検討

23年度末作成の「授業観察シート」は、児童に学習意欲をもたせることや意欲を継続させるための導入・展開・終末の各場面で、同じ観点で観察することができるよう、同じ観点内容を記述していた。

しかし、コアメンバーから「導入と終末の場面で、同じチェック項目では、シートの作成が困難になるのでは。」との意見が出され、それぞれの学習場面で考え得る手立てについて検証できるような形に作り替えるよう話し合われた。

イ 授業観察シートの活用

改善された授業観察シートのフォーマットは、校内のサーバーに保存され、各授業者が自由に活用できるようにした。

事前検討会では、1人1授業実践者だけでなく、検討会参加者も授業の手立てを意識した検討を行った。

事前検討会后、各授業者は指導案とこの授業観察シートを全員に配布し、授業実践に取り組む。参観者は、この授業観察シートを使い、記録しながら授業参観を行う。

〈実際に書き込まれたシート〉

観 察 の 観 点	②学習活動の工夫	児童が主体的に取り組むことのできるような活動を用意している。 話し合い活動・(動作化)・グループ活動 図示化・具体物操作 (その他)	①	2	3	4
	③発問の工夫	思考がまとまるような発問をしている。	1	2	3	4
ま と め	学びのふりかえり	本時の学習について、児童が達成感をもっている。	①	2	3	4

【手立ての有効性について】

学習課題の設定により、それに合わせて子どもたちが自分なりの考えと知識を
つなげることができた。
「動作化」の導入により、子どもたちが主体的に取り組むことができた。また、
グループ活動により、子どもたちが互いに意見を述べることができた。

上に示した例は、後期の5年の国語(単元:作品を自分なりにとらえ、朗読しよう)で取り組まれた実践で作成された授業観察シートである。

事後検討会では、参観者が記入した授業観察シートをもとにして話し合いが進められた。どの検討会においても、参観者が明確に示された観点をもとに、手立ての有効性に絞った議論が進められた。

上の例の実践においては、【意欲を継続させるための手立て】として、設定されていた「動作化」の活動を有効であったと観察者が判断したことが分かる。また、一番下の「手立ての有効性について」という欄には、なぜ有効であるかを判断した理由の記述があり、検討すべき内容について焦点化が行われていたことが分かる。授業後作成された努力点シートを参観していない人にも周知することで、各授業

実践の共有化を図ることができた。

授業観察シートを使用した授業者の声として、「努力点シートを参考に、授業の手立てのヒントをもらった」というものがあった。授業観察シートの作成から努力点シート作成までの流れが、実践の成果と課題を共有化させる一因となっていると考える。

【成果(○)と課題(●)】

- 授業観察シート作成では、多くの意見を取り入れ、使いやすく修正できた。
- 授業観察シートの活用が、授業者に「手立て」を意識した授業づくりを促した。
- 授業観察シートの活用が、事前・事後検討会において、検討すべき内容の焦点化を図ることに役立った。
- 授業観察シート自体の細かい分析は授業者任せになったため、その成果と課題を他の学年に共有化することができていない。

② 「努力点だより」を活用した授業実践の成果と課題の共有化

「努力点だより」は、成果と課題、要素の共有化を約束する手立てである。

初年度の計画は、「1人の授業につき、1部ずつ発行する」というものであったが、前期実践では、合計2部に留まった。これにより、各1人1授業実践の要素の周知が遅れてしまった。これは、「たより」の定型を案として用意する前に、実践が始まり、作成に間に合わなかったためである。

コアチームで、運営方法の相談を行ったところ、「今年度については、1人1授業実践終了後に発行してもよいのでは」という意見が出たので、後期分については、3学期の始めに発行と決定された。

【成果(○)と課題(●)】

- 1人1授業実践を、全体授業作成の参考とすることを明示し、1人1授業実践に新たな役割を持たせることができた。
- 1人1授業実践の要素の紹介により、他者の授業実践で得られた要素を参考にして授業実践を計画する姿が見られた。
- 要素を授業に応用した明確な姿を捉えることができず十分な共有化が図られているか不明瞭。

9 研究のまとめ

本研究において取り組んだ「コアチーム」を活用した組織的な授業研究は、現任校の教員研修として一定の成果を挙げ、軌道に乗りつつある。一方、授業実践の成果と課題の共有化など、課題も残された。

今後は、本研究の成果と課題を踏まえ、より組織的に授業研究を行い、効果的な教員研修が推進できるようにしていきたい。